

説教／茨城・土浦めぐみ教会／2025年1月26日（日）／神谷武宏

説教：「いのちのうめき」

聖書（新改訳2017）：ローマ人への手紙8：18～27

讃美：讃美歌298番「やすかれ、わがこころよ」、讃美歌191番「いともとうとき」

（α）おはようございます。

この度、土浦めぐみ教会の大切な礼拝にて、御言葉の御用に当たらせて頂きまして、恐縮しますと同時に心より感謝いたします。私は、今回、茨城に来させて頂くのは、今年の8月に続き、2回目になります。昨年、日本基督教団の竜ヶ崎教会にお招きを受けまして奉仕をさせて頂きましたが、また半年もしない内に土浦へ来させて頂いています。ありがとうございます。

実は、娘と息子の二人が東京で暮らしているものですから、関東に来る機会がありましたら、会うことが出来ますので感謝です。娘は昨年、東京で出会った方と結婚しまして、慣れない東京生活をしています。また、息子は東京で仕事を始めたばかりで、いろいろと大変そうで、生きづらさも感じているようですが、何とか頑張っているようでした。いい経験を積んでいるように思います。

以前、ラジオを聞いていましたら迫力のある歌を歌っている方がいて、竹原さんという人で、たまたま聞いていましたら、いい歌、いい歌詞だなあと思いました。「東京一年生」という歌で、田舎から出て来て、東京で暮らし始めて、いろんな意味で苦しんでいる若者に贈る歌のようです。一部、歌詞を紹介しますと・・・。「東京一年生」

暮らしづらいのは、街のせいじゃない  
暮らしづらいのは、大丈夫 夢があるからさ  
がんばれ、がんばれ！！ 東京一年生！！

田舎から、大都会の東京に出て、せわしい街、社会の中で、街に酔い、人の多さに酔い、暮らしづらさを感じるということは良くあることでしょう。つい、そんな時に、街のせいにしてがちです。でも、暮らしづらいのは、あなたが夢に向かって頑張っているからなのだ。生きている証拠なんだ。大丈夫！暮らしづらさの中で、呻いていい。生きているんだから、頑張っているんだから、呻いて、呻いて、夢に向かって、頑張ろう！！ がんばれ！東京一年生。そんな意味の歌なんだろうなあと、勝手に思いながら聞いていましたが・・・。呻くということは、生きている証拠です。命に向き合い、歩んでいるからこそ、呻きが伴うのでしょうか。

今回茨城は、2回来たばかりですが、ただ、東北の福島、宮城、岩手の方は、何度も来させて頂きました。14年前の東北を中心に起きた東日本大震災の未曾有の状況を受けて、私が所属します沖縄バプテスト連盟で災害支援委員長をさせて頂きまして、その年の4月末

に青森から福島まで、車で移動しながら、所々でボランティアをさせて頂き、その後も何度か訪れて、ご奉仕をさせて頂きました。

ただ、ここ茨城までは、足を運ばなかったのですが・・・茨城でも大きな揺れと津波の被害、原発の汚染など大変な被害に遭われたかと思います。本当に辛く、苦しく、悲しい状況の下にあったかとお察しいたします。

沖縄で震災のニュースが流れました時に、沖縄のお年寄りの多くが、異口同音に沖縄の言葉で「戦(いくさ)うみんじゃすんやー」と、語っています。沖縄戦を体験されたお年寄りが、「戦(いくさ)を、戦争を思い出すねー」と話されるのです。「戦(いくさ)うみんじゃすんやー」と沖縄のお年寄りが沖縄戦を思い起こすほどに、大変な状況であったであろうと、心痛めたものでした。

以前、震災から10年以上が経って「復興を実感しましたか？」というアンケート調査を見たのですが、多くの方が「復興しているとは思えない」「昔の思い出が消されるのが寂しい」と、「復興」と言ってもただ建物を、道を造ればいいというものではない。もっと寄り添いながら、対話を続けながら、また、人、一人ひとり、「復興」の捉え方の違いがあることを丁寧に聞きながら、感じながら、成されるべきはずですが……。国がもしそのように丁寧に、傾聴しながら成されているのであれば、東京オリンピックなど開催できたでしょうか？本当の意味での「復興」を、国は目指さなければならないはずです。国は国民の声に、呻きに、本気になって聞く必要がありますね。

今朝は、「いのちのうめき」についてお話をします。このローマ人への手紙を書きましたパウロは、「いのち」について、他の手紙でもこのように記しています。ピリピ人への手紙1章21節に「私にとって生きることはキリスト」という言葉がありますが、それは「キリストは私の命である」という意味にもなります。また、コロサイの手紙3章4節では「あなたがたの命であるキリスト」という表現もあります。そして福音書においては、イエス・キリストご自身が、「わたしはよみがえりです。命です」(ヨハネ11:25)、と語り、また「わたしが道であり、真理であり、命なのです」と、イエス・キリストご自身が、「わたしは、“命である”」と宣言しています。

すなわち、命は、全ての命は、イエス・キリストに通ずるということであり、私の命の中に、キリストがおられるのであり、私の命は、キリストの命であるということ。あなたの命の中に、キリストがおられ、あなたの命は、キリストの命であるということです。さらに全ての命は、この世に生きる動物や木々、草花も、全てはキリストの命に通ずるということです。

私たちは、動物の命、木々や草花の命を頂きますが、神様が与えてくださった動物の命も、木々や草花の命も、良く考えて、無意味に命をむさぼるのではなく、その命への感謝を忘れずに、私たちの命が豊かに育むように、感謝をもって、“頂く”ということが、とても大切なことであろうと思いますね。

全ての命は、イエス・キリストに通ずるということを知りたいものです。そのようなことを、多くの人間がそう理解し、命の尊さを覚える時に、私たちの世界から、命が軽視されること、命が脅かされること、命が暴力によって奪われることはなくなるはずで、私たちは、そういう意味でも、キリストの言葉を、福音を宣べ伝えて行く必要があります。

今朝のローマの手紙には、三つの「命の呻き」について記されています。まずは、19節から22節ですが、ここは、被造物の呻きについて記されています。被造物とは、神様が造られたもの、動物や木々、草花などの全ての生き物の事ですね。その被造物の呻きを記しています。19節の「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです」というのは、先ほども述べましたが、「命」はイエス・キリストに通ずるということを知る者、平和をつくり出す者、神の子と呼ばれる者たち、そのような人たちの現れるのを切に待ち望まれているということでしょう。命が軽視されず、脅かされず、暴力によって奪われることのない世界が待ち望まれているということです。

次に、23節から25節には、私たちの呻き、キリスト者の呻きについて記されています。23節に「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も」とありますのは、キリスト者のことではありますが、キリスト者は、目に見えないものを望んでいくことがキリスト者であるというわけです。私たちは既に、目に見えないイエス・キリストを信じている者ですから、当然、目に見えないものを、忍耐を持って待ち望むべき者であるわけです。

すなわち、私たちの世界から、命が軽視されない、脅かされない、命が暴力によって奪われない世界を、希望を持って待ちわび、イエス・キリストがそれらの命を担われたように、私たちキリスト者も、軽視される命に向き合い、担うべき使命を受けて行くこと。そのことが私たちには問われているということでありましょう。

そして、26、27節には、聖霊の呻き、神の呻きが記されています。聖霊が、神が、呻くとはどういうことでしょうか？ここに神の深い愛が、私たちへの強い思いが表されています。神もまた、私たちと同じように、苦しみ、悶えながら、私たちを執り成すために、呻きを持って、私たちを、助けてくださるというのです。聖霊の呻き、神ご自身も呻くということは、何を意味するのでしょうか？それは、私たちも呻きを発していいし、呻きを発する者でなければならないということです。この世に生きるということは、“呻きを伴なう”ということでもあります。

今日、礼拝にお越しの皆様の中にも、きっと、苦しみ、悲しみをお持ちの方がおられることでしょう。ご自身の呻きを、誰にも言えない、語れない呻きを持っておられる方はおられません。神様は、あなたの呻きを聞いてくださるのです。あなたの苦しみ、悲しみの呻きを受け止め、あなたが、その呻きから、解放へと向かうように、とりなしてくださるのです。呻いていいのです。また、教会はあなたの呻きを受け止めてくださいますから、牧師へ、信

徒同士でも、語り合っただけならと思います。教会は、おひとりお一人の呻きを聞き合う場、共有する場、そして、祈り合う場であります。

逆に、呻きを伴わない生き方というのは、命に向き合わない歩みをしていないかと逆に心配になります。自分の命に、他者の命にも、向き合わない歩みをしていないだろうか・・・ということにもなりましょう。

呻くということは、生きている証拠です。命に向き合い、歩んでいるからこそ、呻きが伴うのです。他者の命に向き合い、自分の命に向き合うからこそ命は呻くのです。その命に、呻きに、キリストは伴ってくださいませ。

今朝の「いのちのうめき」ということから、皆さんと沖縄の呻きについて、少し分かち合っただけですが・・・。

私どもの普天間バプテスト教会では、教会の業として 2012 年 10 月から米軍海兵隊の普天間基地のゲートの前でゴスペルを歌うということで、軍事基地に対して“NO”の意思表示を表し続けています。教会からは 300m ほどのところにその軍事基地はあるのですが・・・。

「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」という名称のこの会には、他のバプテスト教会から、またカトリック教会の方、日本聖公会、日本基督教団、日本基督教会、セブンスデー、無教会派の方など、様々な教派の方々が集い、毎週月曜日の夕方 6 時からの 1 時間、赤い幟に十字架を記し、「NO! OSPREY NO! RAPE NO! BASE」との英語の文字を掲げ、主への祈りと賛美を捧げています。今年、13 年目を迎えています。

この働きについては、今夕のオープン礼拝にて映像をお見せしながら、詳しくお話しますので少しだけ触れておきます。

実はこのゲート前ゴスペルを始めるきっかけは、保育園の子供の祈りに励まされたことが始まりでした。当時、2012 年は、普天間基地にオスプレイが強行配備されるということで大騒ぎでした。9 月 9 日には、「オスプレイ配備反対県民大会」が行われ、10 万 3 千人が集い「配備 NO」を叫びました。沖縄の県知事も全市町村長も明確に配備反対を示しています。それでも日本政府は沖縄の民意を無視し、米国は何の規制もかからず決められた通り、2012 年 10 月 1 日にオスプレイは、沖縄の人々の頭上を飛び、いとも簡単に配備してきました。これまで何度も墜落事故、不時着事故を起こし、死者も多く出ている“欠陥機”とも称されているこのオスプレイ。軍事産業、経済優先の考えからか、安全性よりも運用、使用が優先され、“沖縄ならいいだろう”という在り方で、沖縄の人々の住宅街を頻りに飛び交っています。アメリカでは民間上空を米軍機が飛ぶことは許されていませんし、天然記念物のコウモリがいる森の上空も飛ぶことは許されていません。沖縄はコウモリよりも以下ということでしょうか。この現状は沖縄差別そのものです。

オスプレイが配備されたその週の土曜日は、緑ヶ丘保育園の運動会だったんです。秋晴れの下、行われたのですが・・・。運動会の競技が終わって最後に保育園の父母会長さんが挨

撈をされ、「今日は運動会の最中、オスプレイが飛ばなくて良かったですね」と話されたんですね。私もそのことが気になっていましたから本当にその通りだ、良かったと思いました。実はその方の息子さんが（園児が）、運動会の前に「オスプレイが飛ばないように」とお祈りをしていたというのです。私はそのことを聞いてとても感動しました。私は開会式の挨拶と祈りの中で、そのオスプレイのことに触れようかどうか迷っていましたが、結局触れませんでした。今日はオスプレイのことは忘れて運動会を楽しもうと思ったのです。…と言うより、正直に言いますと私には“オスプレイが飛ばないように”と祈る勇気がなかったのです。祈りに自信がなかった。もし、お祈りしてオスプレイが飛んだらどうしよう・・・なんて考えてしまって、本当に情けない牧師です。

でも園児の“オスプレイが飛ばないように”という祈りにどれだけ励まされたことか。そうですね、祈りはきかれるのです。祈りには力があるのです。そのような思いから、普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会は始まって行きました。今、全国十数か所で、普天間のゴスペルに呼応するかたちでゴスペルの会が起こされています。それは、沖縄の“呻き”に応えるかたちで、自分たちが立っているところから、勇気をもって行動を起こしたということでしょう。

聞こえてくるのでしょうか？「いのちの呻き」が……。命は、全ての命は、イエス・キリストに通ずるのです。「わたしは命である」とおっしゃったイエス・キリストの呻きと言ってもいいでしょう。「いのちの呻き」を聞くということは、キリストの呻きを聞くということでもあるのです。

私たちのキリスト教会は、この命の呻きを聞いているのでしょうか？「御霊の初穂をいただいている私たち」は、目に見えない呻きが聞こえているのでしょうか？私たちは「いのちの呻き」を聞くことの大切さをこのところから教えられて行きたいものです。

主イエス・キリストの恵みと平和が皆様の上にありますように。(Ω)

\*お祈りいたします。

昔も今も、とこしえに変わることなく、生きて働かれる平和の主よ。今朝も礼拝に預かる恵みを感謝いたします。今週の歩みも、主の豊かな導きがありますように。

心病む方々に、病を抱えておられる方々に、主の慰め、癒しがありますように。

私たちは常に、まことの平和を願い、祈り、声を上げ、つくり出す働きを一つ、担うことが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン